

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年4月10日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520124

研究課題名（和文）

ステートの性質に関する研究 - “過程芸術”としての版画の可能性について-

研究課題名（英文）

Study on the Nature of the State.

-About the Possibility of Printmaking as a “Process Art”-

研究代表者

田島 直樹（TAJIMA NAOKI）

筑波大学・芸術系・准教授

研究者番号：50292545

研究成果の概要（和文）：

本研究では研究対象として、数多くのステートを残した19世紀フランスの銅版画家シャルル・メリヨン（1821～1868）に焦点を当て、メリヨンの代表的16作品について、(1)図版資料の収集、(2)国内の美術館・画廊における実見調査、そして(3)世界各国美術館の公式サイトを通じたステートの画像収集を行い、各ステートの性質について分析結果をまとめた。合わせて、ステートの様々な性質を検証すべく、「見せること」を前提としたステートの制作プロセスの構築を目指して実験制作を行った。

研究成果の概要（英文）：

In this study, focus on Charles Meryon(1821-1868) who is French printmaker of copperplate at 19th century. I selected his 16 works and reserched the change of image by the state. As a result, I could find some defferent nature in his works. And I tried to find new possibility about the expression of printmaking by my production experiment.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：版画

科研費の分科・細目 芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：過程芸術・メリヨン・銅版画・ステート・版表現

1. 研究開始当初の背景

これまで版画におけるステートは、主に以下の二つの形式で紹介されることが多かった。

(1)各版種の技法書において、技法解説に連動する形で制作プロセスを例示

(2)画家・版画家の画集や展覧会図録において、作品完成までの創作過程を資料として掲載

上記の場合、ステートはあくまで作品が完成するまでの試験的印刷であり、独立した作品として表に出ることは無い。しかしながら、例外的に版画のこうした性能を積極的に制作に取り入れ発表した作家も存在する。版を自在に取り扱い、本来作家本人にしか見ることのできない絵画制作の過程を、版画の性質を応用して第三者に開示しようと試みたこれらの行為は、ステートが持つ意味とその可能性を拡大させた。しかし、これまで彼等のステートに関しては、各作家の一表現手段として紹介されてはきたものの、ステートというテーマのもとには総括されておらず、この分野の研究が充分になされてきたとは言いがたい。そこで本研究では、応募者の一制作者としての立場を活用し、理論と実践の双方向からこの分野の調査を進めた。

2. 研究の目的

本研究では、ステートが単なる試し刷りとしての機能のみならず、それ自体が独立した作品として、または版の変化の様相を開示する“過程芸術”として、十分に価値を持ちうることを、資料調査・取材を通して実証することを目的とした。本研究の特色は、芸術作品の創作において、中途過程を記録化できる唯一のものとしてステートの性質を見直し、その可能性を探るために、“過程芸術”という新たな視点から、ステートを扱う過去の作家や現代の作家について検証・分析を試みようとする点にある。“過程芸術”というキーワードをもとにステートの効果を総括することで、芸術の歴史の中に新たな潮流を見いだすことができると予想される。また、制作実験では、調査した内容を吟味した上で、これまでの事例とは異なるアプローチからステートの制作を試みた。実験を通して、ステートに潜在する性能を抽出し、その芸術的効果を最大限発揮できる展示方法を模索した。

3. 研究の方法

研究対象として、数多くのステートを残した19世紀フランスの銅版画家シャルル・メリヨン(1821~1868)に焦点を当て、メリヨンの代表的16作品について、(1)図版資料の収集、(2)国内の美術館・画廊における実見調査、そして(3)世界各国美術館の公式サイトを通じたステートの画像収集を行い、各ステートについて性質分析を行う。合わせて、ステートの様々な性質を検証すべく制作実験に取り組み、最終的には「見せること」を前提としたステートの制作プロセスの構築を目指した。

4. 研究の成果

本研究の成果を論文『シャルル・メリヨンのステートに関する研究』にまとめることができた。この論文は、主にメリヨンの代表的16作品に関する図版資料の収集とその分析を核として調査を進めたものである。

まず、メリヨンの代表的カタログ・レゾネであるデルティユ&ライト版及び、シュナイダーマン版のカタログ・レゾネに収められていないステートの図版について、以下の方法で調査・収集を行った。その際、各作品のステートの変遷について、両レゾネの詳細な解説を参考にステートナンバーの判定を行った。

(1)図版資料の収集を通して各資料に掲載されたステートの調査では、上記2冊のカタログ・レゾネ(105点・70種)に加えて40冊の画集や展覧会カタログから、450点の図版を収集し、新たに20種のステートを加えることができた。

(2)国内の美術館・画廊における実見調査では、8つの施設(国立西洋美術館、三重県立美術館、町田市立国際版画美術館、ギャラリー・グラフィカ、石橋財団ブリヂストン美術館、世田谷美術館、岐阜県美術館、ギャラリーかわまつ)に調査に赴き、計52点の作品の実見調査を行うことができた。結果、新たに1種のステートを加えることができた。

(3)世界各国美術館の公式サイトを通じたステートの画像収集では、デジタルアーカイブを活用し、世界各国33美術館の公式サイトでメリヨンの作品の検索を試みた。結果、合計486点の図版を収集し、この中で上記(1)・(2)に含まれない24種のステートを大英博物館(英)、オークランド美術館

(米)、ハーバード大学美術館(米)、シカゴ芸術研究所(米)、ボストン美術館(米)、フリック・コレクション(米)、ミネアポリス芸術研究所(米)、ニューヨーク公立図書館(米)、クリーブランド美術館(米)、パリ国立図書館(仏)、メトロポリタン美術館(米)のサイトで確認できた。これら希少なステートを本論で使用するにあたり、各施設に申請し、許可を得た上で掲載した。

以上のように、(1)、(2)、(3)を通して、のべ1,093点の図版をもとにステートナンバーの判定を行い、全141種のステートの内、115種のステートを確認することができた。2冊のカタログ・レゾネ掲載の70種に、新たに45種のステートを加え、より詳しくメリヨンのステートに関して検証することができた。表1は作品「両替橋」のステートの図版一覧である。16作品の内一つの事例として示した。

これまでのメリヨンに関する先行研究において、全てのステートの画像を網羅した図版集は存在しなかった。それ故、「画像によるステートの変遷の検証」を実行するための資料収集を行った結果、未確認のステートが26種あったものの、当初の目的はある程度達成できたと考えている。この論文(総頁数425p)を博士論文として提出

表1：シャルル・メリヨン作品「両替機」ステート図版一覧（空欄は未確認のステート）

ニスケース		
第1ステート		第2ステート
第3ステート		第4ステート
第5ステート		第6ステート
第7ステート		第8ステート
第9ステート		第10ステート
第11ステート		第12ステート

また、メリヨンのステートに関する研究と並行して、制作者としての立場から実験制作を行い、「過程芸術」としての版画表現の可能性を模索した。作品完成までに産出される複数のステートを組み合わせ、制作プロセスをあえて提示した作品を制作した。

作例1：ステートを並列に配置した作品
 作品《phoenix》は、完成までに11ステートを要した銅版画作品である。この作品は、一枚の作品が完成するまでに辿った変遷を提示する試みで制作した。単なるステートの羅列に陥ることを避ける為、検討を重ねた結果、最終ステート（完成品）を中央に、他の近い番号の各ステートが極力隣り合わないよう配置した。結果、1枚の作品としてはやや単調な図柄ではあったものが、11枚の同じ構図の繰り返しと、各ステートに加えた微細な調子の変化が相まって、全体として見れば思いの外表情が豊かな作品となった。



作品《phoenix》

作例2：各ステートを立体的に配置した作品
 作品《stardust》は、完成までに7つのステートを要した銅版画作品である。本作品では、各ステートを立体的に組み合わせ、作品化することを試みた。直方体のフレームの中に7枚の帆布を前後に同間隔に配置し、金属金具で張った。この作品の意図としては、完成品としての版画の背後には、本来表には出ないこうしたプロセスが存在することを物理的に提示することにある。各ステートの全体像を個別に見ることは不可能であるが、重なり合うイメージが、ステート数が進むとともに少しずつ変化を伴いながら完成形へと結実していく様子を示した。通常、版画作品は紙に刷られる。版面上に施された微細な凹凸を刷りとるには繊維が細かく弾力のある紙が最適な素材であるからだ。しかし、今回のプランを構想する中で、作品を立体的に配置するアイデアが浮かんだ時、四隅に穴をあけテンションをかける為、ある程度の強度が求められることから、素材として布に焦点を当てた。その中でも、紙が持つ柔軟性とある程度の耐久性を備えた布として帆布を選択した。紙に比べるとインクの食いつきやディテールの再現性は劣るが、今回は立体的展示方法を優先させた。結果、本来鑑賞者には見えないはずのプロセスを視覚化するという目的は達成することができたと思う。



作品《stardust》

以上の2作品は、メリヨンのステートに関する研究を進める上で着想を得た試作である。単独のステートではなく、全てのステートを組み合わせ、新たな表現手法を模索するという目的で行った。結果、両者ともに、普段の平面作品とは異なるものができ、筆者にとっては新鮮な体験であった。上記2点を含む研究成果の発表の場として展覧会『田島直樹銅版画展“増殖装置”』を開催し、10点の作品を展示公開した。今回の実験制作で得た結果をもとに、今後更に発展させ、版画表現の可能性を追求していきたいと考えている。

以上のように、理論と実践の双方から研究を行い、その成果を論文と実験作品としてまとめ、発表することが出来た。

5. 主な発表論文等

[論文]

田島直樹、シャルル・メリヨンのステートに関する研究、査読有、2012、博士（芸術学・筑波大学）学位論文（乙第2594号）、
<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/limedia/dlam/B31/B3180198/1.pdf>

[展覧会]

田島直樹、田島直樹銅版画展”増殖装置”、2012年10月31日～11月10日、セッションハウス・ガーデン（東京都・新宿区）

[その他]

ホームページ等

<http://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/hanga/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田島直樹（TAJIMA NAOKI）
筑波大学・芸術系・准教授
研究者番号：50292545